

◎万葉集卷二十・防人歌

①天平勝宝七歳乙未二月、相替り
て筑紫に遣はさるる諸国の防人
等の歌

遠江国	7首 / 18首
相模国	3首 / 8首
駿河国	10首 / 20首
上総国	13首 / 19首
常陸国	10首 / 17首
下野国	11首 / 18首
下総国	11首 / 22首
信濃国	3首 / 12首
<u>上野国</u>	<u>4首 / 12首</u>
武蔵国	12首 / 20首

84首 / 166首

②昔年防人…………… 8首

③昔年相替防人……… 1首

合計 93首

◎万葉集卷十四（東歌）の配列

国名判明	雑歌 5	上総 1首 下総 1首 常陸 2首 信濃 1首	東海道 — 東山道
	相聞歌 76	遠江 2首 駿河 5首 伊豆 1首 相模 12首 武蔵 9首 上総 2首 下総 4首 常陸 10首 信濃 4首 <u>上野 22首</u> 下野 2首 陸奥 3首	東海道 東山道
	譬喩歌 9	遠江 1首 駿河 1首 相模 3首 <u>上野 3首</u> 陸奥 1首	東海道 東山道
国名不明 140	雑歌 相聞歌 防人歌 譬喩歌 挽歌	17首 112首 5首 5首 1首	

合計 230首

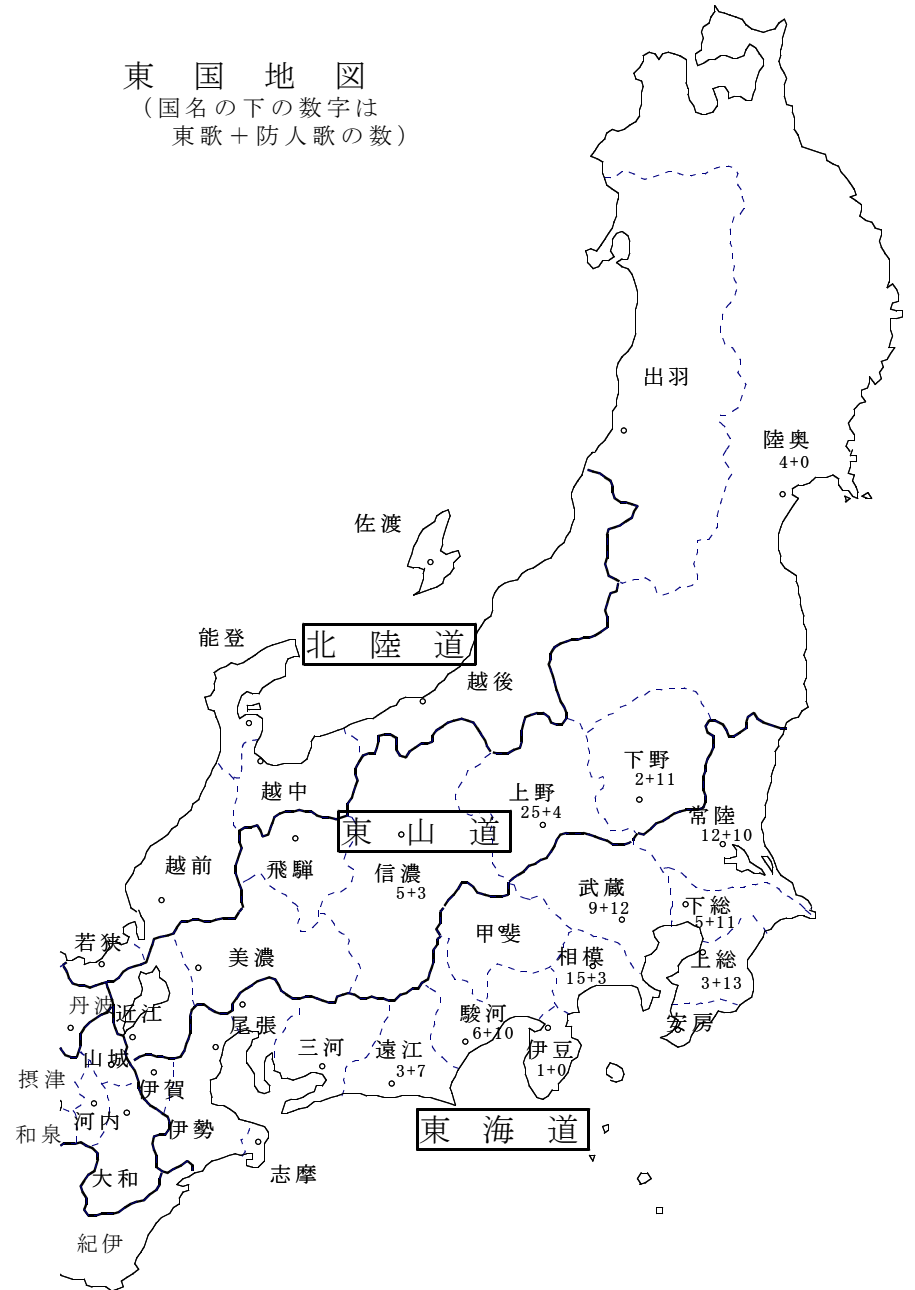
上野国東歌をよむ
〜群馬県北部の歌を中心に〜

北川和秀

令和元年度ぐんま県民カレッジ
「令和」から始める「万葉集」講座 第3回

令和元年十一月二十一日
吾妻振興局中之条合同庁舎

東国地図
 (国名の下の数字は
 東歌+防人歌の数)



【伊香保】

- ・万葉集の時代の「伊香保」は榛名山のこと。
- ・「いかほ」という語の構成は「いか(厳)」+「ほ(穂・秀)」と考えられる。
- ・「ほ(穂・秀)」は、突き出ているもの、他からぬきんでているもの。例えば、稲穂、槍の穂、波の穂などの「穂」。「炎(ほのほ)」は「火の穂」の意。山の名には「高千穂」「穂高」など「ほ」の付くものがある。「いかほ」の「ほ」も同じ。
- ・「いか(厳)」は「内部の力が充実していて、その力が外形に角張って見えている状態」(『古典古語辞典』の「いかづち【雷】」の項)を表す語で、「いかし(厳し)」「いかめし(厳めし)」「いかる(怒る)」「いかづち(雷)」などの「いか」も同じ。
- ・「いかほ」の「いか(厳)」は、この山のもつどのような性格を「いか(厳)」ととらえたのであろうか。

- ・山の姿
- ・雷の巣窟
- ・火山

①伊香保嶺に雷な鳴りそね吾が上には故はなけども子らによりてそ(三四二一)上野東歌

②伊香保風吹く日吹かぬ日ありと言へど吾が恋のみし時なかりけり（三四二二）上野東歌

《参考》

- a 韓亭能許の浦波立たぬ日はあれども家に恋ひぬ日はなし」（三六七〇）
- b 荒津の海潮干潮満ち時はあれどいづれの時か我が恋ひざらむ」（三八九一）

③上毛野伊香保の嶺ろに降る雪の行き過ぎかてぬ妹が家のあたり（三四二三）上野東歌

《参考》

- ・わが屋戸の君松の木に降る雪の行きには行かじ待ちにし待たむ（一〇四一）

④伊香保ろの八尺の井手に立つ虹の頭ろまでもさ寝をさ寝てば（三四一四）上野東歌

《参考》

- a 虹 にじ〇東国の小児。のじと云。（『物類称呼』巻一「天地」）
- * 『物類称呼』は江戸時代中期の安永四年（一七七五）にできた方言集
- b のじ 虹（『群馬県邑楽郡誌』前編附録「二、方言」）大正六年（一九一七）刊
- c ノジと発音するのは注者の少年の頃にも村裡には行はれた。

（土屋文明『万葉集私注』三四一四番歌の語釈）

* 土屋文明氏は、明治二十三年（一八九〇）西群馬郡上郊村保渡田生。

【子持山】

○子持山若鷄冠木の黄葉つまで寝もと吾は思ふ汝は何どか思ふ（三四九四）未勘国東歌

【利根川】

○利根川の川瀬も知らず直渡り波にあふのす会へる君かも（三四一三）上野東歌

【沢渡】

○左和多里の手児にい行き逢ひ赤駒が足掻きを速み言問はず来ぬ（三五四〇）未勘国東歌

《沢渡神社の万葉歌碑について参考》

○君ノ尾よりもなほ谷川にそひて一里あまり出れば、伊香保より直に草津へかよふ道（みち）にいづ。板橋をわたり右にたどりて沢渡の出湯にいづ。四万より四里半とぞいふなる。こゝにもゆあみする人つどへり。伊香保より草津へのゆきかひにはかなならずやどる所なれば、夜はわきてにぎはへり。薬師のみ堂にまうで、見れば、万葉集なる

左和多里能手児尔伊由伎安比安可故麻我

安我伎乎波夜美許等登波受伎奴

と云歌を石にゑりて立たり。こゝと定たるはたしかなる證ありてにや。

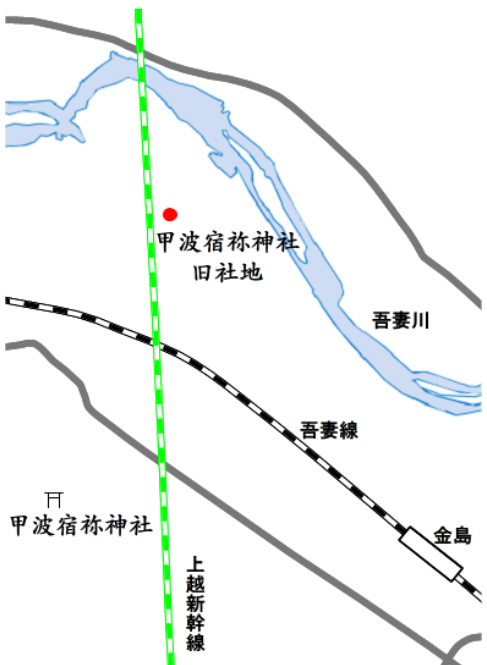
（富田永世『上毛温泉廻』文政十一年九月一日成）

【可保夜が沼】

○上毛野可保夜が沼のいはる蔓引かばぬれつつ吾をな絶えそね（三四一六）上野東歌

《参考》

- a 入間路の大家が原のいはる蔓引かばぬる吾にな絶えそね（三三七八）武蔵東歌
- b 西の方はるかに川嶋と聞えて、こゝにも甲波すくねの社を見やりたるは、これなん光明院がつかさどれるなりけり。うのとしのわざはひに、其地さへながれうせて、その社は南の方三四町ばかりひきしりぞきて作りたてたとぞ。…名に高きかほやが沼も、むかしこの境内に有けるを、近き頃となりては俤すらなくなりしうへ、また其地さへぞうせはてたる。（奈佐勝阜『山吹日記』天明六年（1786）五月十三日条）
- * 「うのとしのわざはひ」は天明三年の浅間山の大噴火によつてもたらされた災害



◎余談（伊参）

①平安時代前期の吾妻郡の郷名

吾妻郡

長田 奈加太 伊参 伊佐萬 大田 於保太

（二十卷本『倭名類聚抄』卷七）

* 『倭名類聚抄』は平安時代前期の一種の百科事典。みなものしたがう源順が編纂した。承平（九三一〜九三八）年間に成立。ここに、当時の国名、郡名、郷名が全て載っている。

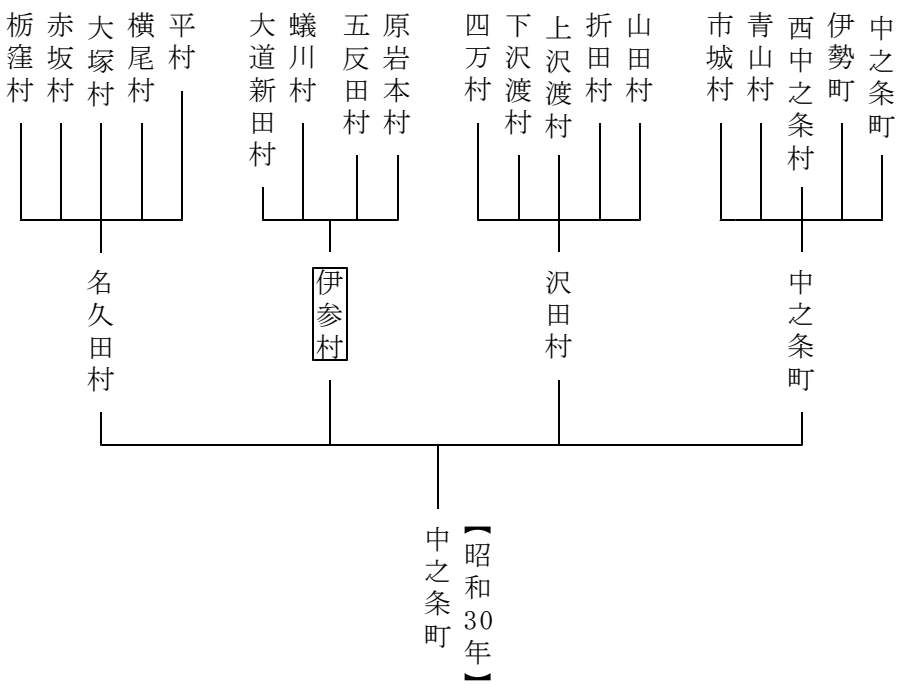
②明治二十二年の町村合併

明治二十年頃、日本国中には七万一千の町村があった。これはほとんど江戸時代以来のものであり、近代日本にとって、一つ一つの町村の面積はあまりにも狭すぎ、行政上不都合だった。そこで、明治二十一年に市町村制が施行され、翌明治二十二年に大規模な町村合併を行い、全国の市町村の数は一万五千になった。この大合併の折、江戸時代以来の村名は大部分が大字として残り、今に至っている。都市部を除いて、今に残る大字の大部分は江戸時代まで遡れる貴重な地名である。

群馬県においては、明治二十年頃に約千あった町村が、明治二十二年の合併で二〇九に統合された。

この折の町村合併で、四村が合併して伊参村が成立した。伊参村の名は、古代、この地が伊参郷に属していたという伝承による。

【明治22年】



* 『上野国郡村誌』（成立は明治一〇年代か）「上野国吾妻郡伊勢町」の「字地」条に次のようにある。

- 天神 本町ノ南ニ接ス、東西四町卅九間南北二町二十二間
- 伊参 本町ノ南ニアリ、東西五町南北二町三十八間
- 川端 本町南端ニシテ吾妻川ニ浴フ、東西拾四町南北二町三十間
- 忠則 本町ノ東ニアリ、東西四町四十二間南北五町十四間
- 宇津間 平村西北ノ飛地ヲ云、幅員未詳
- 小原 本町ノ北方、東西十壹町十七間南北五町十三間
- 天台 本町ノ北部、東西十二町南北四町四十間
- 古垣内 本町西北ニアリ、東西四町五間南北四町

こちらこそが平安時代の伊参郷の遺称地か。